

書評

「原発は”安全”か」 たった一人の福島事故報告書

竹内 純子著：小学館

福島原発事故については、国会事故調査報告書や政府、民間、東電、原子力学会など様々な組織が報告書をまとめているが、本書は経団連のシンクタンク 21世紀政策研究所で、昨年 1 月に急逝した澤昭裕氏と共に政策提言を行ってきた著者がまとめたもの。

他の報告書は事故から数年以内に書かれているが、本書は事故後 5 年を経た状況を踏まえて書かれたもので、強化された安全対策など今の原子力発電所の状況がわかる労作である。

原子力発電は海外からの導入技術でスタートし、当初は技術の安全目標やリスク管理の考え方も熟していなかった。本来は原子力を利用することで増えるリスクがどの程度であれば社会的に受容可能なのか、これを「安全目標」として設定するところから安全対策が定まるのだが、日本では原子力発電の安全目標は設定されてこなかった。これまでに日本でも事故やトラブルを経験するごとに様々な組織が作られてきたが、安全性の課題を公にできない風潮や背景があり十分に安全対策がとられてきたとは言い難かったようだと言及する。

東京電力に勤めてはいたものの、原子力には全くの素人の著者が、恩師の遺言にもとづき、懸命に専門家に取材し、その結果を一般の人に伝えたいという姿勢が随所にうかがえる。

「このままでは日本は『戦略なき脱原発』に漂流していき、その結果責任を国民が負わされることになる」。亡くなる 2 日前に澤氏が遺した言葉だそうだ。原子力をやめるという選択を国民がするのであれば構わないが、それによって他のリスクが増大することはないか、原子力技術の利用に伴うリスクはこれ以上小さくすることはできないのか徹底的に考え、覚悟をもって選択すべきだと著者はいう。

原子力を進めるのであればどうすればいいか。①事業者には安全性向上の取り組みと制度的な後押しを、②官には安全規制の適正化、③災害発生後の対応能力の向上、④信頼感の構築など、福島事故の経験を生かすための 4 つの視点の提示も納得がいく。大変誠実に書かれている本という印象が強い。(齋藤隆)